随想

情報と制禦

小貫　章

いつか上京の折、数寄屋橋際の日動画廊を覗いていたら隣に「熊本県物産館」があってつい懐しく入りこんで熊本の菓子など買ったりした事があった。私は生れは東京だけども現在のような植民地化した東京には「故郷」という概念は薬にしたくもない、下手に感慨に耽っていようものなら忽ち自動車にひき殺されてしまう。だがしかし一寸考えなければならぬ事がある。このような都市近代化の波は遅かれ早かれ同一の歩調で熊本にもやって来るのが必至だという事である。つまり、物の値段が東京であがれば大阪についで熊本に来る、どうせ今の文明社会では一つの波は必ず他へ押し寄せるのでまあ孤立化は起らないし又孤立化しても困るのだ。この意味で最早全日本が一つのコミュニケーションを持った有機体なのである。扨、今から二十年前位に名付けられた学問でサイバネテイックスという学問がある。現代の電子計算機や、この頃流行のO・R（オペレーション・リサーチ）等はある意味でこの学問の応用になっている。サイバネテイックスというのはギリシヤ語の「舵を取る人」という意味だそうで、数学・物理学はもとより社会学・神経生理学・人類学までの広い応用範囲を持っている。育ての親の数学者ウイーナーによると、現代文明は情報（コミュニケーション）と制禦（コントロール）の二つである。生物であろうと社会であろうと外界から刺激が来れば夫を情報の形で中枢部に伝達し、それに対して意識的又は無意識的に制禦の作用が起こる。前記の船の舵で言えば、船がもし右にまがれば、左に曲げる舵のエンヂンが自動的により早く廻るような仕掛を持つ船が「自動制禦」を持っていると言えるし、或はもう少し詳しく言えば、右に曲ったという刺激を情報にかえて理解し、更に伝達して左に曲げる機能に作動命令を与える、このような自動制禦が凡ゆる現象の本態に含まれているというのである。外界の刺激に応答してさっと命令を与える速度は当然その機能の敏感度が決定する、敏感度が大きすぎると制禦作用、つまり反対の方向に動かす力が効きすぎてゆき過ぎを起し、結局振動を起して不安定になる。一方余り鈍感では制禦の役をしなくなってしまう。このどちらの状態も有機体には病的の状態と言わねばならない。

まあこの理論の言う事は至極尤もだが、これを熊本県に当てはめると次のようになる。今年は水害が七月に起きたが、その場所が情報伝達の組織が少い所や破壊された所は明かに復興が遅い、つまり熊本県という有機体は何はともあれ速やかな情報伝達組織を持っている事が良き有機体になるための第一要件である。扨次に伝達された情報に対しどう制禦を働かせるべきかという反応の速度だが、これが自動的で且適度の敏感さを持っていることが大切である。外部から来た刺激に反応しなければ中枢部は意味を持たないが、扨反応してその制禦を実行すべき部分が、実動能力を持たなくては何もならぬ。俗に言う無い袖は振れぬという通り無い手足は動かせない、以上を判り易く表にすると。

災害発生→情報伝達→中枢部の情報判断→命令伝達→制禦作用の作動開始

となるが、この始めから終りまでの時間経過の長さが何時でも問題になるのである。この波がのんびり遅れて来るのが熊本と東京の差だと言ったら熊本人はおこるだろうが。いやその時間差は或程度は許容出来るけれども、要は上の機構が滑に且適正に流れてゆく様にするのが行政の骨であろうと思うのである。汚職をしたり、サボったり、威張っていて能がないお役人では有機体の正しい細胞にはなれないだろうと思うのである。

（熊本大学教授）

パリーを想う

正木忠男

萩原朔太郎の詩ではないが、一頃パリーと云えば夢の彼方のあまりにも遠い国のように思えたものだったが、戦後急速にその矩離は縮ってしまった。朝日本を発てば明日はモンマルトルの並木路を胸ふくらませ乍ら活歩出来ると云う時世だから、それこそ全く夢のような話である。

そのパリーには、今熊本出身の数人の画家が生活を楽しんでいる。エッチングの著名な作家で、先程イタリーのフィレンツェーアカデミー名誉会員になった浜田知明さんや、自由美術会員の中村健一郎氏夫妻。それに郷土画壇の先輩格で本光会会員の田代順七、清原武則、両先生。ちょっと毛色の変ったところでは、まだ年若い女性の身乍ら一人で旅立って目下大いにハッスルしている吉瀬佳久子嬢、それから芸大を出てまもなくパリーの人となって既に数年を送っている緒方一成君。又、最近永年の夢が実を結んで故国をあとにした新田陽子女史。最後は、パリー歴最古参で、パリーを訪れる郷土の人々の世話をよくしてくれる森山裕之青年等、全く賑かな熊本部隊である。美術の歴史が相当古いと云ってもこれ程大挙して熊本画人がパリーにたむろしたと云う例は、末だかってないことである。以上の諸氏は殆んど私とは親しい間柄にあるので、いつもパリーの空を偲んでは諸氏の健斗を切に祈っているのであるが、特に森山青年は、初めから出発迄その実現に協力してきたので、特に注意深く彼の前途を見守っているのである。この森山君は、植木の産で、十九才の頃よりパリー行きを決意し、ほんとに苦しい生活の中から五年がかりでやっとその夢を実現した逞しい青年である。

僅かな資金乍ら憧れのパリーの土を踏めたのも、偏えに彼の後援会長を引受けて下さった現、商大学長の鰐渕先生の温情が大きな推進力になったことは云うまでもないが、知事さん、市長さん、植木の町長さん始め、報道機関や、郷土の多くの方々が、真心からなる声援を送って下さったことが如何に大きな力となっていることか。

彼はそれ等の人々の真情に報ゆる気持から静かに自分の生きる道をみつめ、上陸したときは手元に僅か九万円しかなかったような苦境に在り乍らよくこの苦しみを切り抜け、既に二年半の歳月をパリーの空の下で暮してきたのである。今迄どんなに苦しくても滅多に弱音をあげなかった彼も、パリーに着いた時、手元の金を見つめ乍ら、これから一体どうして生きて行くか途方に暮れさめざめと泣いたそうである。

そんな第一信を受けた時、私も咖か悲愴な感に襲われたものだが、第二信ではもう既に彼本来の逞しい姿に立ち直り、『おテントさんと、お米の御飯は必ず僕の後ろについて来ると信じています。パリーの風景は素晴しいです。丁度僕の為にこの街は出来ているような気がします。』と力強く書かれてあった。彼は今、アルバイトとして自分の作品を売り乍らパリーの国立美術学校に通い、道遠い画業の一駒々々を克明に刻んでいるのである。

今、この一人の青年画家の歩いてきた道を静かにふりかえってみて、何かほのかな歓びを感ずるのは、単に私一人の感傷であろうか。

（熊本県文化懇話会　常任世話人）

夏と住まい

西村光代

今年は例年になく蚊の出現がおそく、いつもの年の五月にもなれば、同ずアパートでも隣のお米屋さんの庭木が金網の垣を越して私の住まいの庭まで重くたれこめているので、その辺の湿地で蚊が発生するのか、いち早く飛び込んで来るのが私の住まいである。硝子戸を閉め切るのが嫌いな私は、夜でもおそくまであけ放している。そして蚊の飛び交う中で私は平然と仕事をしているのだが、たまたま私のいる部屋に入ってくる子供達は、そんな私の無神経さに腹を立ててどうかしているんじゃないですかと云いながら容赦なく戸を閉め切ってしまう。

そんな私でも眠る時だけは蚊張をしきりにつりたがるので、二階に居をかまえている二人の息子達は、階下で蚊張をつれば蚊は二階に上って来て僕達を襲いますよ、協同態勢をとって下さい、と云う。それでは貴方達もつりなさいよ、と云えば、いま時蚊張をつるなんて！、と反駁する。日本家庭に住み慣れて、夏は蚊張をつるのもと決めそれが古めかしい風情とに結びつけられていることにも何の抵抗もなくひとつの風俗のしきたりと受け入れている私達年配の者には、蚊張のない夏をゆめゆめ想像することさえ出来ない、暑い暑いとこぼしながらも涼しげな淡彩画のついたうちわなどをもって蚊張の中に入る心地は満更でもないと、夏を忌避しながらもその季節の訪れを素直に入れている諦めもあるようだ。だが子供達にして見れば、そん風情気は、むしろ迷惑なことでしかない。

子供達が蚊張をつりたがらないのにも一理はあるようだ。何しろ六帖の彼等の部屋には二つの立机と本箱、ステレオ整理ダンス等がすえてある。その他階下からはみ出た道具まで縁側に積まれてあるので出入りの障害にもなる。その上三枚にも満たない畳の空間に床をのべ蚊帳をつるなど若い彼等には考えられない理不尽なことなのだ。

ここ二、三年来蚊取線香だけで夜を通している息子達がよくもそれをけとばさずにいることが不思議に思える。

たまたま外出から自分の住まいに帰って来て思うのだが、よくせまあ鶏小屋のような住いにいられたものだと。普通のサラリーマンなら、ここらあたりで思い切って自分の家をと水をさされる処だが私は自分の家を建てることなど夢にも考えてはいない。夏休みになったら東京の息子も帰省するだろう。そうすると私の住いは今よりも、もっと窮屈になる。だが息子達はその窮屈な住いの中で夏休みを案外のびのびと過すことだろう。

（「詩と真実」同人）